

医療DXの現状と未来 ～スコアでみる医療現場の本音～

東北大学大学院 医学系研究科 医学情報学 中山雅晴

序文

総人口の減少と高齢化の進行、医療人材の不足と地域偏在、そして病院経営の逼迫——わが国の医療を取り巻く環境は、かつてない厳しさに直面している。こうした状況のもと、医療DXが国策として推進されている。全国医療情報プラットフォームの構築、電子処方箋の普及、診療情報の標準化など、臨床データの「連携・活用」を中核に据えた取り組みは着実に進展しつつある。しかしながら、真に持続可能な医療システムを構築するには、データ連携基盤の整備だけでは不十分であり、業務プロセスの抜本的な再設計や医療・IT人材の戦略的育成、現場起点の運用設計、適切な調達とインセンティブ設計、そしてサイバーセキュリティやガバナンスの強化など、より包括的なDXの推進が不可欠となる。

本特集では、こうした認識に立ち、医療DXの多様な側面について第一線の識者にご執筆をお願いした。政府主導で進む電子カルテ情報共有サービスや電子処方箋の現状と展望、医療情報標準交換規約であるFHIRの実装としてのOMOPとの連携や画像データの取り扱い、今後の普及が大いに期待されるPHR、そして海外動向との比較検証といった基盤整備に関するテーマを取り上げている。加えて、課題解決の観点から、院内で用いられるべきAIによる文書作成支援や業務効率化ツール、さらには医療現場の率直な認識についても論じている。

特筆すべきは、本特集が単なる技術論や制度解説にとどまらず、実装現場の生の声を重視している点と考えている。医療DXの成否は、最終的には現場での実効性によって測られる。テクノロジーと制度、そして現場実務をいかに調和させるかという問いに対する実践的な示唆を、各執筆者の経験と洞察から読み取っていただきたい。各論考では、あえて「現状」と「5年後の見通し」を100点満点で評価する形式で表現している。かなり無謀なお願いで執筆者にはご迷惑をおかけしたが、読者にとって各テーマの発展段階を直感的に把握できるようになっているものと自負している。最後に、本特集が政策立案者、産業界、そして医療現場という三者の視座を結び、限られた資源の中で最大の成果を生み出す実装への道筋を示す一助となれば幸いである。